

る会誌の発行が軌道に乗り、現在の隆勢をみるに至っているわけです。

先生は『佐伯市史』（四十九年完成）『蒲江町史』（五十二年完成）に引き続いて、五十三年には本匠村史編さんを依託されていました。私も編さん委員の一人として参画していました。先生は郷里の本匠村史編さんには大変意気込んでいられました。五十六年に入って慢性の肝炎が進む中を、随分無理をしてペンをとり続け、村史も九分通りできあがったものの病には勝てず、ついに不届の客とられました。責任感の強い先生は、死のまきわまで村史編さんのことに気をやんでおられたとのことです。

先生がクリスチャンであったことを知る人は少いのではないかと思えます。特殊な宗教を信ずる人にありがちな、教義を人にすすめたり、宣伝したりするようなことは、少しもありませんでした。

『佐伯市史』『蒲江町史』『本匠村史』編さんというばう大な仕事のかたわら、『佐伯史談』の発行、退公連の幹事等々……よくもこまめに務められたものと思えます。どんなに苦勞をして事をなし遂げても、極めて謙虚で

少しもその功を人に誇るところがなく、ただ神の愛を信じて身をもって示す信念の人であったと思われれます。

先般の葬儀に参列し、郷土の先輩として尊敬し、先生を身近に知る私にとっては、ほんとうにご苦勞様でしたと言うよりはか言いようがありませんでした。

もう何年か生きてはしかったです。一年でもよい、楽な余生を送ってほしかったです。ほんとうに惜しまれてなりません。

恩師 羽柴先生

曰 井 龍 峰

（賛助会員・佐伯市城下東町）

「Aさん、お早ようございます、お元気？」

「やあBさん、お早よう、お蔭さまで……久しぶりですね。」

「時に羽柴先生はお元気なんでしょうか。」

「ええ、先生はとても元気そうですよ。」

「そうですか、それはよかったです……。」

この会話が、私ども小学校当時の同級生が路傍で会ったときに交す挨拶のパターンであった。それほど先生は

教え子たちに親しまれ、慕われ、尊敬された存在であった。

先生が初めて下堅田尋常高等小学校に赴任され、最初に私ども五年生四十数名の担任になられたのは、昭和五年の四月でした。当時先生のお歳は二十三・四歳ぐらいでしたでしょうか。色は浅黒く、頭はジャンگری坊主で、普段はたいいてい黒の詰衿の服を着ておられたのを五十年経った今も、はっきり思い出すことができます。それから二年乃至三年間先生の膝下で教えを受けることになったのです。

先生がいかにすばらしい教師であったかをここで詳細に記すことはもちろんできませんしが、その一部だけ思いつくまま述べてみたいと思います。

先ず先生は課外指導の名人であったことです。現在、学校で行われている課外集団指導を、すでに昭和の初め、しかも周到な準備のもとに計画・立案・実践していたという事です。私共の場合、五年生の夏休みに行なった堅田地区波越の「山の神」での林間学校や、上浦町浅海井浜での臨海学校の楽しさは、今も忘れることはできませんが、そのハイライトとも云うべきは、やはり六年生

最後の修学旅行でした。当時先生が私どものために作製して下さった「修学旅行唱歌」を同級生の小寺須摩子さんが大切に保存されていましたので公開発表した次第です。（別紙参照）

この旅行唱歌の全歌詞とメロディーその一、その二、その三はもちろん、先生の作詞・作曲になるもので、プリントの絵や地図の精密さと併せて、今拝見してもただ感嘆するばかりです。云うまでもありませんが、先生はオルガンの名手であり音楽に深い造詣をおもちであったし、絵画にも非凡な技を身につけておられたようです。

次に先生は、実に字の上手な方でした（私はかつて四十年余り教壇生活をしましたが、先生のような字を書くことの上手な方にお目にかかったことは一度もありませんでした。）あのきれいなペン字で四十数人の一人々々の毎日の日記を検閲され、よい所には、を、を、特に優れた表現の箇所には○○○をつけ、最後には必ず、心のこもる短評まで入れて下さるのです。これが延々三年間続いたのですから驚きです。先生は私共のために文字通り身を粉にして努力されたのです。

今年の年賀状の中に同級生のある人から「先生はなくなりましたが、先生は私たちの中に生きています……。」とありましたが、ほんとうにそうだと思います。私も同級生は、仲良くいつまでもいつまでも羽柴先生とともに生きて行きたいと思っています。

羽柴さんからの最後のお手紙

秋 月 琇 次

(賛助会員・東京目黒)

私は羽柴さんに一度もお目にかゝったことがないので。然し佐伯史談一二八号の「羽柴副会長の死を悼む」という会長の文章には実に驚かされ、暫くは言葉も出ませんでした。

羽柴さんのお付き合いは専ら文通に依るもので、そもそも初めは四十一年七月号の佐伯史談誌の「郷土佐伯の碑文」というタイトルで養賢寺に在る私の曾祖父に当る秋月橋門の碑文に就ての記事がご縁となって文通が始まりました。手紙でご交際願っている内にお人柄も段々とわかり、その礼儀正しき、真摯さ、また物事の正確さを期する上で徹底的に追求される態度などしばしば頭

の下がる思いを致しました。特にガリ版時代の雑誌発行のため、毎月お独りで奮闘努力されるご様子には、たえようのないむしる驚嘆さえも覚えたものです。

羽柴さんとの最後の文通は、私が永い間、神田の古本屋に頼んであった『橋門韻語』という詩集が手に入ったので、若しご入用なら差上げてもよいという手紙に対して「藩主毛利家の倉庫に在るのを私は見付けたが、管理厳重で持出しも叶わず、止むなく暗くなるまで見当り次第写しとるような有様で、その他佐伯には一冊も見当らないから是非欲しい」とのことでしたので、早速その本をお送りしました。それに対するお礼のお手紙が私に対する最後のお手紙となったのです。そのお手紙は何時もお手紙と違ってお悦びの感情を露骨に紙面に表わしたもので、私も本当に喜んで頂けてよかったと思つた次第です。しかも御筆蹟にいささかの乱れもなく、例の如くご達筆で、ご病後ご静養中もお元氣の様に思っておりましたのに、それから僅か二、三ヶ月後に死の床につかれご他界になるとは露程も想像出来ぬことで、此度のご訃報には全く驚かされ、且つ又断腸の思いが致します。その最後のお手紙は、左の如きものです。